

## 中学生の保健室頻回来室にいたる 行動変化のプロセスとその意味

酒井都仁子\* 岡田加奈子\*\* 塚越 潤\*\*\*

### Process and Meaning of Behavior Change through Which Junior High School Students Become Frequent Visitors to the Health Room

\*Kuniko Sakai, \*\*Kanao Okada, \*\*\*Megumi Tsukakoshi  
\*Miyazaki Elementary School, Chiba City, \*\*Chiba University,  
\*\*\*Tokyo Gakugei University Senior High School

This study focused on 'frequent visitors', students who visit the health room frequently with no specific purpose, and aimed to clarify the process and meaning of behavior-changing to become frequent visiting. The research was conducted on 15, 3rd year junior high school students by semi-structured interviews, and the data was analyzed with the use of the modified grounded theory approach. The main result of the research is as follows :

In [Process of behavior-changing to become frequent visiting], "Physical disorders" and (fellow) including "low hurdle by acquaintance privilege", which belong to [Trigger Category], change to 'wait-and-see attitude', and then become 'marking' and 'naturalization'.

#### キーワード

頻回来室者 frequent visitors

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ modified grounded theory  
approach

保健室 the health room

中学生 junior high school student

養護教諭 yogo teacher

\* 千葉市立宮崎小学校

\*\* 千葉大学教育学部

\*\*\* 東京学芸大学附属高等学校

## I. はじめに

養護教諭の歴史は、明治38年にトラホーム患児に対する洗眼・点眼のために採用された学校看護婦に始まった<sup>1)</sup>ように、当初保健室は、傷病に対する救急処置の場であった。しかし、子どもたちの健康課題は拡大し、それに伴い身体的不調をはじめ、相談、つきそい、何となく等、実に様々な理由により子どもたちが保健室に来室するようになった。その様ななかで、現場の養護教諭たちは、以前より頻回に来室する子どもたちの存在を何となくは気づいていた<sup>2)</sup>。しかし、これらの子どもたちを正面から取り上げたのは、1975年の学校保健研究の特集が最初と思われる。その時には「保健室頻回利用児（学童・生徒）」という言葉が用いられていた。この時代には、身体性、心因性、対人環境や環境適応の様々な問題が背景にある現象として捉えられていたり<sup>2)</sup>、急性・慢性の健康障害が理由で利用する者<sup>3)</sup>や微症状や不定愁訴をもって利用する者<sup>4)</sup>として捉えられたりしていた。

しかし、その後しばらくの間はこれらの子どもたちや現象を正面から取り上げる論文はほとんど存在しなかった。

その後20年近く経て、「保健室頻回来室者」という言葉とともに、研究の対象として注目を集めるようになる。1994年には平山<sup>5)</sup>が保健室頻回来室者を対象とした質問紙調査により、実態や子どもの特徴、および健康調査との関連を明らかにしている。さらに、2005年には櫻井<sup>6)</sup>らが質問紙調査で保健室頻回来室生徒とサポート源をもたない生徒のメンタルヘルスの検討を行い、修士論文レベルでも、研究<sup>7, 8)</sup>がみられ始めるようになった。この頃では、保健室頻回来室者は疾患が発見されることもあるが、主に心理的なことがらが原因と考えられる子どもが多いと捉えられている<sup>5) 9)</sup>。

つまり注目を集めるこの時代の背景には、平成9年の保健体育審議会答申でも、心の健康問題などにも対応する、健康相談活動という養護教諭の「新たな役割」も提言されたことにもあらわれているように保健室が特に「心の居場所」と言われはじめ、それに付随してか中学校においては、「何となく」による来室が来室理由全体の10.3%にものぼっていること<sup>10)</sup>があげられる。

保健室頻回来室者（以下、頻回来室者）という言葉が定着し、それらの研究が行われてはいるが、その研究は頻回来室者の割合や特徴、その背景要因を質問紙調査等で明らかにしているものに多くはとどまっている<sup>5, 6)</sup>。

つまり、筆者らの知る限り「何となく」を理由に来室する生徒に着目し、頻回来室

者の言葉に立脚した具体的データからその行動を概念化した研究はない。

従って、本研究では、日頃意識されることなく過ぎ去ってしまうこの頻回来室という現象の一連の動き等を生徒たちの言葉から丁寧に掘り起こすことは、頻回来室という現象の理解および行動の説明や予測に役立つと考えられる。

本研究では頻回来室という現象を理解する為に、社会的相互作用に関わり、プロセス的特性をもった現象に適し<sup>11)</sup>、また実践的活用を明確に意図した研究方法<sup>11)</sup>であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ、そのなかでも修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を用いて分析を行った。M-GTAは、大きくは、インタビューなどで語られたデータから概念を生成し、複数の概念間の関係を解釈的にまとめ、最終的に概念関係図（以下、概念図）として提示するものである。

保健室に頻回来室することで、養護教諭や保健室にいる他の生徒たちとの間に相互作用が展開されており、それらにより、頻回来室者にとっての保健室の意味はどのように深まっているのかについては別稿「中学校保健室頻回来室者にとっての保健室の意味深まりプロセスおよびその影響要因—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析—」<sup>12)</sup>にてすでに報告した。本報告では、特に行動に着目し、中学生の保健室頻回来室にいたる行動変化のプロセスとその意味を明らかにすることを目的とした。

子どもたちの健康状態や社会の変化などに対応する形で変化してきた養護教諭の役割や保健室という場所に着目し、保健室頻回来室者の頻回来室にいたる行動変化を明らかにすることは、それらの子どもたちに対応する養護教諭や学校教育関係者にとって意義深いと思われる。

## II. 方法

### 1. 方法

#### 1) 対象

A県B中学校3年生の頻回来室者（定義は後述）20名を対象に面接調査を依頼した。そのうち日程の都合等の理由により協力が得られなかった4名を除く、16名の協力が得られた。面接の録音状況が悪く逐語録をおこせなかった1名を除く15名（男子10名、女子5名）を分析の対象とした。

## 2) データ収集方法

2002年7月と9月に半構造化面接を面接者と被面接者の1対1で行った。面接時間は30分から1時間程度で、面接内容は被面接者の理解を得て録音し、逐語録としてまとめた。面接場所は、人の出入りがないよう、保健室や応接室、多目的教室で行った。なお7)②で後述する理由により、2002年6月7月および9月に計15日間の参与観察を行った。

## 3) 分析方法

分析方法には、M-GTAを用いた。

## 4) M-GTA分析手順<sup>1)</sup>

M-GTAの分析の手順は、大きくはまずデータから概念を生成し、複数の概念間の関係を解釈的にまとめ、最終的に概念関係図（以下、概念図）として提示するという流れになる。

まず概念の生成について説明する。はじめに、最も多様性がありそうな一人のデータを選ぶ。そしてその一人分のデータに目を通し、次に逐語録の一頁分あるいは適当に区切りの良いところでみていく。分析テーマ（頻回来室にいたる行動変化のプロセス）に関連する箇所に着目し、それが頻回来室者にとって意味するものは何かを解釈し、その部分を具体例とする概念を生成し、分析ワークシートに記入する。

分析ワークシートとは、上記の要領でつくった概念の名称、概念の定義、概念の具体例となるヴァリエーション、そして分析の際等に浮かんできたアイデア等を書き留める理論的メモと呼ばれるものの4項目で構成される。1概念につき1ワークシートの形式で進める。

次に実際に生成した概念を例に説明する。まずインタビューデータのなかで分析テーマに関連する箇所「2年の時は一番上（＝3階）だったから1階に行く時はほとんど、冷水機とか、それが目当てで行って、その帰りにちょこっと顔を出して、みたいな。」という部分に着目した。まず、この部分についての意味を自分の解釈とは反対の観点からも考えた上で、それを適切に表現する言葉は何かという順序で検討を行った。そして検討を重ねた結果、「保健室に顔をつなぎ自分のしやすい場所とする為に、保健室の側を通った際、入室する事」という定義をし、最終的に『マーキング』という概念名を生成した。そしてこれら进行分析ワークシートに記入し、分析ワークシートは表1のようになる。

このように概念を生成しながら、つくった概念の有効性をみる。概念の有効性の見

表1 分析ワークシートの例

概念名	マーキング
定義	保健室に顔をつなぎ自分のいやしい場所とする為に、保健室の側を通った際、入室する事
ヴァリエーション	「2年の時は一番上 (= 3階) だったから1階に行く時はほとんど、冷水機とか、それが目当てで行って、その帰りにちょこっと(保健室に)顔を出して、みたいな。」  「通りかかったら寄りみたいな感じ。」 (以下、省略)

理論的メモ：何故、側を通った時入室するのだろうか。それによりどんな効果があるのだろうか。

木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践一貫的研究への誘い一，弘文堂，東京，2003

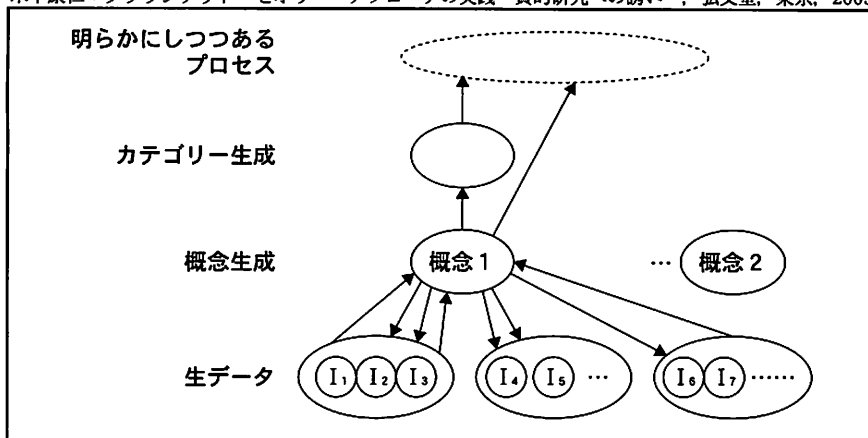


図1 概念生成モデル

方としては、まずつくられた概念のヴァリエーションを新たなデータのなかから見出せるかどうかである。見出せない場合はその概念が有効ではないと判断する。また、解釈の恣意性を防ぐため、できる限り自分の分析や解釈とは反対例を考え、そのような概念がデータからつくられるかどうかを意識しながらデータをみていく。また、概念の生成および有効性をみながら、さらに同時並行で、概念間の相互の関係を考え、カテゴリーという複数の概念のまとまりをつくっていく。そして最終的に概念とカテゴリーによって、明らかにしたい現象を説明する概念図をつくるのである。この思考法を表したモデルを図1に示した。

また、質的研究によって集められたデータは複雑で解析しにくく、高度な解釈技術が求められる<sup>13)</sup>。従って、本研究ではこの一連の過程でM-GTAに精通した複数の人々からのスーパーバイズを5回受けた。

## 5) 言葉の定義

頻回来室者は、単に回数のみでは定義できないと指摘されており<sup>2) 14)</sup>、学校や生徒の状況を踏まえ、対象校の養護教諭による選定が適当であると考えられた。従って、本研究では対象校の養護教諭に頻回来室者の判断を委ね、「頻回来室者」とは「身体的不調や相談などの明確な理由はないが、週に2回以上、保健室に来室する生徒」とした。

## 6) 対象校の概要

対象校は生徒数が260名ほどで、郊外に立地しており緑豊かな環境下にある。養護教諭の経験年数は26年目であった。保健室の利用の仕方について、生徒には入学直後の学年集会の際に「休み時間であればいつでも誰でも入室してよい」との説明をし、教職員に対しても周知徹底を図っていた。

## 7) 対象校選定理由

本研究の対象校は2001年度、筆者が「心の教室相談員」という立場として週2日12時間勤務し、生徒と面識のあったB中学校である。対象校を一枚に絞った理由としては以下の2点である。

- ① 本研究ではデータ収集法として半構造化面接を採用したが、この方法は、被面接者から語られることの質や量は面接者の影響を多分に受ける。面接者の影響とは、面接者の雰囲気、質問の仕方等であるが、思春期の感受性豊かな中学生の場合、その他に面識の有無、また面接者とどのような関係であったか等が大きな影響要因となると考えられること。
- ② 質的研究では被面接者から語られた事の文脈を理解、解釈をするための感受性が求められる。これは被面接者と話し合ったり、それらの状況に馴染んだり等の経験が大きく影響をすること。

従って本研究では対象校をB中学校一枚に限定した。それ故、本研究結果がどの程度現実を表しているかという真実性と今日的意義を確認するために、次の方法2を実施した。

## 2. 方法2

### 1) 目的

質的研究では、その評価視点として、量的研究における妥当性に代わり真実性<sup>15)</sup>および今日的意義<sup>16)</sup>が重視される。真実性とは、質的研究の結果が現実を表している時に、真実性があるとされる。その真実性を確認するため本研究では、研究の概要と結果を複数の養護教諭に示し、グループインタビューを方法2として行った。ここでの目的は方法1で結果としてつくられた概念図がどの程度現実を表しているかを明らかにすることである。

### 2) 対象

中学校勤務者および経験者の養護教諭11名を対象とした。

### 3) データ収集方法

2003年5月に2つのグループにわかれ、約1時間のグループインタビューを行った。なお各グループに司会者1名、紙面による記録係2名がついた。また、被面接者の了解を得て録音、録画し、逐語録としてまとめた。

### 4) データ分析方法

逐語録としてまとめたインタビューデータのうち、質的研究の評価基準で重要視されている真実性および今日的意義についての意見に下線を引き、分類した。分析は3名で行った。

## III. 結果および考察

II. 方法で言及したようにM-GTAは質的データの解釈が中心となる為、結果と考察をわけて論じることは困難である。従って、以下結果と考察をまとめて論じる。データから概念を生成し、最終的に複数の概念間の関係を解釈的にまとめた概念図、つまり分析の結果を図2に示した。

まず、分析の結果である概念図の全体的な流れについて概念名およびカテゴリー名を用いて説明する。なお、分析の最小単位である概念名は『 』、概念間の関係から構成されるサブカテゴリー名は〈 〉、これらの関係から構成されるカテゴリー名は【 】を用いて表した。

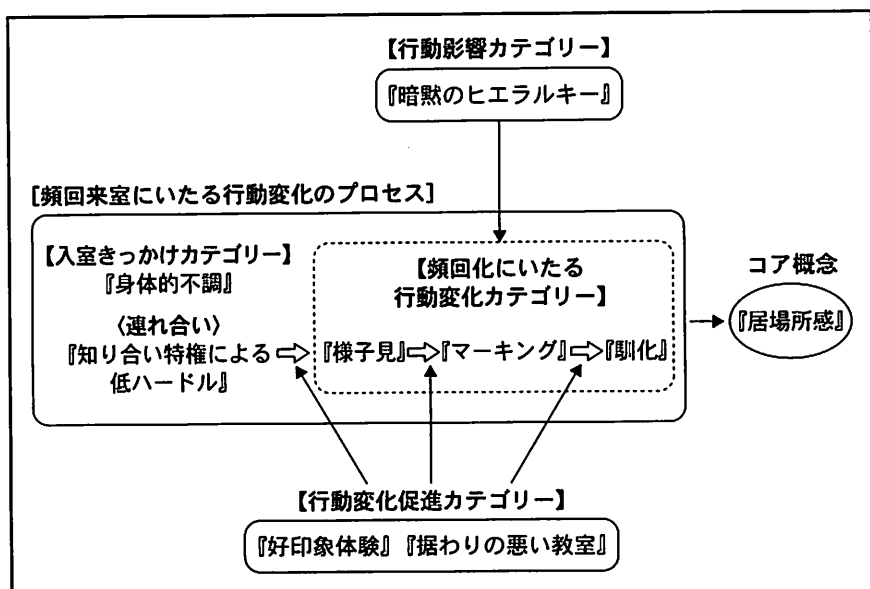


図2 中学生の保健室頻回来室にいたる行動変化のプロセスとその意味

## 1. 中学生の保健室頻回来室にいたる行動変化のプロセスとその意味の概念図全体

まず、分析の結果である概念図の全体的な流れについて概念名およびカテゴリー名を用いて説明する。

頻回来室にいたる行動変化のプロセスとしては、まず『身体的不調』、そして『知り合い特権による低ハードル』を含む〈連れ合い〉といった【入室きっかけカテゴリー】により初めて中学校の保健室へ入室する。そして【頻回化にいたる行動変化カテゴリー】としては、『様子見』から『マーキング』、そして『馴化』へと変化するプロセスが考えられた。これらの行動変化のプロセスを経ていくことで、頻回来室者は保健室に対してこの現象のコア概念である『居場所感』が得られていき、高まっていくと考えられた。これらの行動は、保健室での『好印象体験』や『据わりの悪い教室』といった【行動変化促進カテゴリー】により変化が促され、また【頻回化にいたる行動変化カテゴリー】は『暗黙のヒエラルキー』といった【行動影響カテゴリー】により影響を受けると考えられた。



## 2. 各カテゴリーの概念について

### 1) 【入室きっかけカテゴリー】

中学校の保健室に初めて入室する【入室きっかけカテゴリー】には、『身体的不調』、そして『知り合い特権による低ハードル』を含む〈連れ合い〉が考えられた。まず『身体的不調』とは、頭痛や腹痛、けが等身体的不調を理由に入室することで、これはどの学校の保健室でも共通する入室理由である。インタビューデータの例としては「(初めて来室した時の理由は?) その時はけがをしてしまって、それで行きました。」等の発言があった。次に『知り合い特権による低ハードル』であるが、身体的不調等の理由以外での保健室入室は上級生を優先させるという後述する『暗黙のヒエラルキー』の影響により、1年生は通常は入りづらい。しかし、たまたま頻回来室の先輩と知り合いであったことから、身体的不調等の理由以外での保健室入室のハードルが低いことである。インタビューデータの例としては「入学してからすぐ、使っていました。…先輩が(=で)、仲のよい人たちが保健室にいたから」等の発言があった。そして『連れ合い』とは、「友達が行こうって言うから、普通について行って」等の発言のように、友達に誘われ行動をともにすることである。この『連れ合い』の概念は前述の『知り合い特権による低ハードル』を包含すると考えられたので〈連れ合い〉というサブカテゴリーとした。

今日、保健室入室理由は様々であるが『身体的不調』や〈連れ合い〉といった概念名やサブカテゴリー名は、保健室利用状況調査<sup>10)</sup>の入室理由の選択肢のなかに表現名は異なっているものの、「体調が悪い」「出血やけがの手当」「休養したい」「薬が欲しい」や「友達とのつきあい・つきそい」としてあげられている。しかし、『知り合い特権による低ハードル』に類似する選択肢は、「仲間や先生とのおしゃべり」はあったものの、明らかに上級生との関係による入室理由というものはあげられていなかった。このことは、本研究が生徒たちのインタビューデータから概念を生成したことにより、より丁寧に現象を表現できたこと、また頻回来室の独特な入室理由になり得る可能性があると考えられた。

### 2) 【頻回化にいたる行動変化カテゴリー】

【頻回化にいたる行動変化カテゴリー】には、『様子見』から『マーキング』、そして『馴化』へ変化するというプロセスが考えられた。まず『様子見』であるが、「1年(の時)は(中略)先輩たちがいないなって思ったら遊びに行つて、みたいな。」

等の発言のように、後述する『暗黙のヒエラルキー』の影響により、保健室に上級生がいるかないかにより自分が利用するか否かを判断することである。またもう1つには「1年の頃とかは何ていうんですか、先輩とかが先生と喋ってて、何か俺たちはそこら辺でうろちょろしてるみたいな（笑）それだけでなんか終わっちゃって。2年からは結構、何ていうんですか、先輩とか受験とかで忙しくなっちゃって、あんまし保健室とか来なくなって。で、俺たちだけの時とかに先生とかに話したりした。2年生位かな、喋ったの。」等の発言のように、入室しても上級生の様子を見ながら自分の利用方法を選択することが明らかになった。また、「他の学校だったらあんま、そういう保健室が使うっていうこと（＝けがや病気以外の理由で使うということ）はないと思うけど…（何でB中学校はできるんだと思う？）…うちらが行くようになったのは、先輩とかも使ってたから、うちらも使っていいっていう考えだったから」等の発言があった。Bandura<sup>17)</sup>は人間行動の形成について「人間行動はモデリングによって観察行動を介して学ばれる。他人を見ることによって、人々は新しい行動をどのように遂行すればよいかのアイデアを作りあげる。」と述べている。すなわち、この『様子見』は、上級生の行動から自校の保健室の利用の仕方についても観察していると考えられた。またBandura<sup>18)</sup>は「他人がすばらしい報酬を受けるのを見ると、自分も同様のことをすれば同様の報酬を得られるだろうという期待が起る。」と述べているように、モデルの行動が報酬を引き出したり罰を受けたりするのを見ることによって、観察者の行動が変化する「代理強化」は、動機づけ因子としての機能を果たす<sup>19)</sup>という。つまり、『様子見』をすることにより、保健室の利用の仕方を学んだり、上級生の保健室での様子を見ることにより保健室に入室することへの評価をしたり、また自分も上級生のような体験ができると予期することにより、次の行動へとつながると考えられた。

次の『マーキング』とは、保健室に顔をつなぎ自分のしやすい場所とする為に、保健室の側を通った際、入室する事である。インタビューデータの例としては「通りかかったら寄るみたいな感じ」等の発言があった。彼らにとって、入室することに意味がなければ、いくら保健室の側を通ったからと言っても入室しないはずである。入室するには何らかの意味、すなわち、顔をつないでおくという意味があるから側を通った際には、入室すると考えられた。インタビューでは語られなかったが、生徒が「ちょっと〇〇を置かして欲しい」と何か理由をつけて保健室に筆箱やジャージ等、物を置いていくという話はよく聞かれると思われる。これも保健室に自分の存在を印

づける『マーキング』の1つの場合もあると考えられた。

そして『馴化』とは「たぶん習慣みたいになってるから。ずっと保健室行ってるから休み時間になったら保健室で話すっていう（中略）（保健室に行くことが）普通になってる。」等の発言のように、入室回数を重ねることで、次第に保健室に行くという行動に対し馴れることである。

この【頻回化にいたる行動変化カテゴリー】は、保健室と教室の配置の影響も受けていると思われる。対象校のB中学校は保健室と1年生の教室が1階にあり、1年生は教室から昇降口や階段を使用する際には通常は保健室の前を通る構造になっている。従って、1年生は意識する、しないに関わらず、保健室での様子を目にする機会が多く、前述した『様子見』を行いやすい環境にあると言える。そして2年生になると3階の教室へと変わり、物理的距離が増す為、ちょっと覗いて保健室の様子を見る、という機会が減る。その為、あえて保健室に行くまでではないが、体育館への移動や水を飲みに行った（冷水器が保健室の側にある）等、保健室の近くを通る機会があった時には、入室し、顔をつないでおく、という『マーキング』行動がとられやすいと考えられた。そして3年生になると3階から2階へと教室が変わり、2年生の頃よりも保健室との距離が縮まることや後述する『暗黙のヒエラルキー』の影響により、保健室に入室しやすい環境となり、『馴化』へと進むと考えられた。

この【頻回化にいたる行動変化カテゴリー】は、後述する【行動影響カテゴリー】の影響を受け、また、【行動変化促進カテゴリー】により頻回来室にいたる行動変化が促されると考えられた。

### 3) 【行動影響カテゴリー】

【頻回化にいたる行動変化カテゴリー】に影響を与える【行動影響カテゴリー】には『暗黙のヒエラルキー』があると考えられた。これは身体的不調等の理由以外での保健室利用は基本的には上級生を優先させるという暗黙の了解があることである。インタビューデータの例としては、「やっぱ3年がいたら譲りますよね。行きたくても普通に年上だからあれですね、特にまあ普通に」等の発言があった。この『暗黙のヒエラルキー』が影響を与える【頻回化にいたる行動変化カテゴリー】のなかで、特に『様子見』の行動は1年生で多く見られることから、この『暗黙のヒエラルキー』の影響を最も受けていると考えられた。保坂<sup>10)</sup>は「子どもたちが「先輩」という言葉を使い始めるのは、中学生になってからだ」と述べ、中学生になると上下関係を意識することを指摘している。また「先輩は先輩の指示に逆らうことはできないことに

なっている。契約関係はもちろんない。いわゆる打算というものは表向きには存在しない<sup>10)</sup>。」と述べているように、先輩、後輩という上下関係は、勿論、程度の差はあるだろうが、どの中学校においても存在し、生徒たちに浸透している慣習のようなものであると考えられた。

#### 4) 【行動変化促進カテゴリー】

【入室きっかけカテゴリー】および【頻回化にいたる行動変化カテゴリー】といった頻回来室にいたる行動変化を促す【行動変化促進カテゴリー】には、『好印象体験』『据わりの悪い教室』が考えられた。まず『好印象体験』とは、「初めて保健室に来た時の印象は？」(中略)温かく迎えてくれて。(中略)えーと来た時に、うーん、明るく接してくれて、とても素直に自分のけがのした部分、素直に言えました。(中略)とても優しい笑顔でとても入りやすかったですね。」「1番初めのこう、悩みを打ち明けた時に、やっぱ真面目にこうすごい、何ていうんだろう、納得するまでアドバイスしてくれて、で、あーそうだなみたいな、って思ってきた時に、この先生はいいって印象がこう高くなって、で、信頼できるなって思いましたね」等の発言のように、養護教諭や友人との関わり等、保健室での好印象の体験のことである。本稿では頻回来室にいたる行動変化のプロセスに着目した為、抽象度の高い1つの概念にまとめたが、この『好印象体験』とは「中学校保健室頻回来室者にとっての保健室の意味深まりプロセスおよびその影響要因<sup>6)</sup>」にて報告した【保健室体験カテゴリー】の概念を全て包含していると考えられた。すなわち保健室での《物的》な体験である『レストアイテム』『レクリエーションアイテム』、《場的》な体験である『一体感のある場所』『保健室ピアの自然形成』『個対個』、《人的》な体験、すなわち養護教諭との体験である『安定性』『グッドリスナー』『理解者』『自己開示の呼び水』『羅針盤』(これら5つの概念を包含したものを〈給水所としての養護教諭〉というサブカテゴリーとした)といった概念を包含している。従ってこの抽象度の高い『好印象体験』には様々な要素が包含されており、頻回化を促進させる保健室のもつ求心力と言うべく重要な体験であると考えられた。

次に『据わりの悪い教室』とは、「教室は、何か、本当に空気が重くて、みんなカリカリした感じ、みたいな。そんなことはないんだけど、全部押し込められたような、何だろう、自分の気持ちが出せない場所でもあるんですよ。ちょっとだけなんですけど。でも保健室はそんなのがないから(中略)教室だと絶対机に勉強道具って感じで。」等の発言のように、機能的閉塞空間感や高人口密度、人間関係等、様々な理由

により教室が据わりの悪い空間となっていることである。これは前述の保健室のもつ遠心力に対し、教室のもつ遠心力として頻回化を促進させていると考えられた。

例えば、今日私たちが慣れ親しんでいる教室空間にも歴史的な変遷がある。そのことについて、荻谷<sup>20)</sup>は、空間的特徴について以下のように説明している。まず、近代以前の学びの空間である寺子屋については、「机の並び方、先生と子どもたちとの位置関係は、現在の学校の教室とはまったく異なっている。まず、子どもたちは、先生と向き合っていない。先生は、部屋の奥の方に座っている。また、椅子もなく、移動の簡単なすわり机が使われている。(中略)このような寺子屋の空間的な特徴は、教師が学習者に一齐に「前」を向かせる必要がなかったことを意味している。」それに対し、近代の学校空間については「一度に大量の生徒たちを、(効率的に)(すなわち、集団の秩序が乱れないような工夫を凝らして、少ない資源で大量に)教育を行うこと」をめざし、また「1人の大人(=教師)が、集団として子ども(=生徒)を監視し、統制するのに都合のよい空間的な特徴を与えられている。」と説明している。このような空間的特徴を有した教室は、一部の生徒にとって『据わりの悪い教室』になってしまう一因になると考えられた。

前述したような様々な理由により、教室を据わりの悪い空間と感じる生徒にとっては、次に述べる『居場所感』を教室に対して抱くことは難しくなると考えられた。

##### 5) コア概念『居場所感』

「(やっぱ3年生の場所みたいな感じがあるの?) あっ、保健室はありますよ、あるんですよ、本当に、本当に。中1の時からもう(保健室は)3年生の場所って決まってるから」等の発言のように、前述した『暗黙のヒエラルキー』により、身体的不調等の理由以外の保健室利用は上級生を優先させる為、下級生の時は、保健室は先輩の場所という印象である。しかし、「(3年生になって使い方、変わった?) 何かね、おっきい顔できる(笑)」等のように、学年があがることにより、また、入室を重ねることで、保健室を「自分の気持ちが出せる場所」「居心地、家みたいな感じですね、はい。」等の発言のように、保健室は自分たちの場所という感覚の高まり、そして気兼ねなく、自分らしくいられる感覚を抱く『居場所感』が高まっていくと考えられた。

齋藤<sup>21)</sup>は「自らの言葉が他者によって受けとめられ、応答されるという経験は、誰にとっても生きていくための最も基本的な経験である。」と述べている。本研究では『好印象体験』という抽象度の高い概念のなかに包含されているが、前述した通り、頻回来室者は保健室での養護教諭との関わり合いから、養護教諭を『グッドリスナー』

『理解者』と捉えている<sup>12)</sup>とすでに報告した。これは、まさに齋藤のいう「生きていくための最も基本的な経験」を頻回来室者が保健室にて経験していると言えるだろう。そして続けて齋藤は「この経験によって回復される自尊あるいは名誉の感情は、他者からの蔑視や否認の眼差し、あるいは一方向的な保護の視線を逃ね返すことを可能にする。自己主張をおこない、異論を提起するためには、自らがある場所では肯定されているという感情がおそらく不可欠である。」と述べている。つまり、『居場所感』という自分らしくいられる感覚をもてる空間、すなわち他者に自分自身を肯定される空間があることは、子どもの成長を促すと考えられる。また、子どもたちも体験的にそれらを実感しているからこそ自分らしくいられる『居場所感』のある空間を求め頻繁に来室するにいたったと考えられる。

### 3. 質的研究における評価基準—真実性と今日的意義—

真実性を確認するため本研究では、研究の概要と結果を複数の養護教諭に示し、グループインタビューを方法2として行った。その結果、概念図、概念名、本研究についての意見のうち、個々の発言が完結しているもの（他者の発言に続いて同意した等のため、その発言のみでは意味が不明なものは除く）について表2に示す。概念図について現実を表していない等の発言はなく、概念図、概念名について自分の学校と照らし合わせて同意する発言が多く得られた。なお、この後さらに検討を加え多少概念図を変更した。

さらに真実性ととも重要であると考えられている今日的意義、すなわち頻回来室者という存在が対象校のB中学校だけにいる特別な存在なのではなく、どの学校にも存在し多くの養護教諭が日々対応している対象生徒であるのかについても、養護教諭に確認を行った。その結果、人数の多少はあるものの、被面接者全ての学校で頻回来室者がいることが明らかとなった。つまり、今日的意義が確認されたと言えよう。

加えてM-GTA考案者の木下<sup>22)</sup>は、数量的方法論における評価の概念は、グラウンデッド・セオリーにはあてはまらないと指摘している。グラウンデッド・セオリーは、社会的相互作用に関係し、人間行動の予測と説明に関わり、同時に、研究者によってその意義が明確に確認されている研究テーマによって限定された範囲内に関する限り、他のどのアプローチによる研究よりも説明力に優れており、研究の評価はこの点においてなされなくてはならない、つまり、限定された範囲についての説明力で真価を問われるべき方法である<sup>11)</sup>と述べている。また、M-GTAは実践的な活用のための

表2 概念図の真実性（養護教諭に対するグループインタビューによる）

インタビューデータ

概念図

- ・「今まで本当に感覚的に子どもたちを見ていたことがこうやって図式化されてなるほどなっていうのはすごく思いました」
- ・「あっ、そうだなと思って聞いていました」
- ・「こういう感じでだんだんくなっていくというのがわかりやすい。」
- ・「頻回来室にいたる行動変化っていうのはなるほどなと思うところがあって、それは今までも感覚として、この子何か様子を見に来ているなとか、相手を探っているとか（中略）ある程度ははっきりと図式化されてわかりやすいなって納得できるしおもしろいなって思いました。」
- ・「説明を聞いた時に自分たちの生徒を思い浮かべて、あっ、この子たちはこういう段階であーだったのかなって」

概念名

- ・「動物の行動（笑）おもしろいなって。（中略）こんな風にも見えるなっていうか、おもしろいなって思いました。」

本研究

- ・「あの子についてはどうかなって振り返りながら図を見せていただいて、あーそっかそっか、また来る子なんかは好印象の体験があったからなのねとか（中略）こういうのがあると時々見て自分の振り返りができるっていうのはいいなって思いました。（中略）教室の据わりが悪くて来る子がいる、でもやっぱり返してあげられるようなきやいけないんだから、担任の先生とか学年の先生との関わりっていうのが必要だし、いかに自分が人間関係を他の人とつくっていくかっていうのが課題なんだってことが見えてきたりとかいろんなことが見えてくる研究なんだなっていうのがわかって」
- ・「私は去年新採で入ったんですけど、これをみて去年の自分を思い出してあの時これがわかっていればどうしてあの子はこんなに来るんだろう、何が目的なの、自分はいっぱいいっばいで、その子が来ても私が困っている様子がわかっていたりして「先生いつも何かオドオドしているよ」とか言われちゃって。ちょっとこれを見たらすごく「あ、この子は今様子見をしているんだな」とか「マーキングをしているんだな」とかわかるんですけどありがたいな一っと思いました。去年見れたらよかったですな。すごく、あの、初任の人とかすごくありがたい資料になると思います。」

理論生成の方法<sup>11)</sup>であり、データが収集された現場と同じような社会的な場に戻されて、そこでの現実的問題に対して試されることによってその出来ばえが評価されるべきである<sup>5)</sup>と指摘している。本研究ではこの点を踏まえ、前述した通り、方法2として複数の養護教諭に結果を戻した。その結果、「なるほどなっているのはすごく思いました。」や「こういう感じでだんだんくなっていくというのがわかりやすい。」、「自分たちの生徒を思い浮かべて、あっ、この子たちはこういう段階であーだったのかなって」や「いかに自分が人間関係を他の人とつくっていかってというのが課題なんだってことが見えてきたりとか、いろんなことが見えてくる」等、グラウンデッド・セオリー・アプローチの評価規準の1つである内容特性、即ち、現実への適合性、理解しやすさ、多様性に対応できるだけ的一般性、そして具体的領域において自ら主体的に変化に対応し、時には必要な変化を引き起こしていけるような社会的相互作用やその状況へのコントロールという4観点<sup>22)</sup>を満たす発言が得られた。

#### IV. 結論

本研究の目的である、中学生の保健室頻回来室にいたる行動変化のプロセスとその意味についての概念が明らかになった。さらに分析結果である概念図が複数の養護教諭に理解、支持されたことは、今後より多くの養護教諭に頻回来室という現象の理解および行動の説明や予測に役立てられると考えられる。そして、各々の現実場面に応じて、応用、修正されることで、より実践的活用がなされることが期待される。

#### 謝辞

調査に快くご協力くださいましたB中学校の頻回来室者の皆様、そして校長先生、養護教諭の先生をはじめとする諸先生方に厚く御礼申し上げます。またM-GTAを用いるにあたり、分析テーマの設定、概念の生成、そして概念関係図についてご指導、ご助言をくださいました立教大学社会学部木下康仁教授、実践的グラウンデッド・セオリー研究会の皆様深く感謝申し上げます。



文献

- 1) 三木とみ子：養護概説，6-27，ぎょうせい，東京，1999
- 2) 鎌田尚子：特集 保健室頻回利用児の問題—小学生の場合—，学校保健研究，7：314-316，1975
- 3) 鈴木美智子：特集 保健室頻回利用生徒の問題点—中学生の場合—，学校保健研究，7：317-319，338，1975
- 4) 江口篤寿：特集 保健室頻回利用学童・生徒の問題点—コメント—，学校保健研究，7：320-321，1975
- 5) 平山清武，識名節子：森忠繁，保健室頻回来室者の実態および心身の不適応徴候を訴える児童・生徒に対する学校の対応について，平成6年度厚生省心身障害研究，親子こころの諸問題に関する研究，114-124，1994
- 6) 櫻井聖子，青木紀久代：中学生のメンタルヘルスと心理的サポート源としての保健室—保健室頻回利用者とサポート源を持たない生徒のメンタルヘルス検討の試み，学校保健研究，47（1），50-61，2005
- 7) 吉原久仁子：中学校保健室頻回来室者に関する一考察，平成12年度修士論文第12号，140-142，茨城大学大学院教育学研究科，2001
- 8) 喜屋武砂月，金丸貴美：保健室頻回来室者の追跡調査，琉球大学医学部保健学科卒業論文集，23：105-108，1996
- 9) 大原栄子：頻回に来室する場合の健康相談活動，養護教諭の行う健康相談活動，72-76，東山書房，京都，2000
- 10) 三木とみ子，松野智子，山田澄子ほか：保健室利用状況に関する調査報告書，日本学校保健会，31-41，2002
- 11) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い—，弘文堂，東京，2003
- 12) 酒井都仁子，岡田加奈子，塚越潤：中学校保健室頻回来室者にとっての保健室の意味深まりプロセスおよびその影響要因，学校保健研究，47：4，321-333，2005
- 13) Boulton M, Fitzpatrick R.：Quality in Health Care，3：107-113，1994
- 14) 菊地寿江，森田光子：一子どもの心に寄り添う—養護教諭の相談的対応，120-214，学事出版，東京，1993
- 15) Immy Holloway, Stephanie Wheeler：ナースのための質的研究入門—研究方法から論文作成まで—，171-179，医学書院，東京，2000

- 16) Catherine Pope, Nicholas Mays : 質的研究実践ガイド 保健・医療サービス向上のために, 86-96, 医学書院, 東京, 2001
- 17) A. Bandura [監訳者 原野広太郎]: 社会的学習理論, 17-63, 金子書房, 東京, 1979
- 18) A. Bandura [訳者 原野広太郎・福島脩美]: モデリングの心理学—観察学習の理論と方法, 3-69, 金子書房, 東京, 1975
- 19) 保坂展人: 先輩が怖い, リヨン社, 東京, 1989
- 20) 荻谷剛彦, 天野郁夫, 藤田英典: 教育社会学, 103-112, 放送大学教育振興会, 東京, 2002
- 21) 齋藤純一: 公共性, 8-19, 岩波書店, 東京, 2000
- 22) 木下康仁: グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生—, 弘文堂, 東京, 1999